

淫獄に足を踏み入れた美人番記者

### 真夜中の淫ら取材

■あらすじ

旭テレビ報道局きつての美人記者

倉橋律子（二十五歳）は、政界人、財界人をはじめとした数多の大物を相手する験豊富な記者である。

だが、その活躍の裏には淫らな接待取材があった。

「君が全裸でマイクを持ち、僕の腹の上に乗る。

僕は君を突き上げながら質問に答える。これが政治家へ対する女記者の取材だろう」

大物は特異な性癖を持ち合わせていることが多く、律子は時にボンデーシルックの女王様となり鞭を振るい、また時には縄で全身を縛られ、浣腸に悶絶をする。

世の禁域にまで足を踏み入れた律子の行きつく先は……。

## ◆目次

### フロログ 洗礼

- 一 嗚咽の接待取材
  - 二 被虐と恥辱
  - 三 番記者愛奴たち
  - 四 羞恥のダブル浣腸
  - 五 饗宴、美しき番記者
  - 六 女体散る最終ラウンド
- エピソード 番記者の行きつく果て

## 【登場人物】

倉橋律子(二十五歳)  
くらはしりつこ

旭テレビ報道局の記者

見透かしたような鋭い目つき、長い黒髪 of 美しい美女。

上原美咲(三十一歳)  
うえはらみさき

旭テレビ報道局事務室

律子の先輩にあたる経験豊富な女記者。

戸塚博昭(四十八歳)  
とづかひろあき

日本国、防衛省のキャリア官僚。

典型的な好色政治家で、女がらみの不祥事ばかり起こす。

鴨下雅也(三十八歳)  
かもしたまさや

日本国、総務省の官僚。

普段は部下に厳しい態度で接しているが……。

桑島隆則(五十二歳)  
くわじまたかのり

大手企業の桑島製薬から出馬した日本の政治家。財界人。

美女を締めあげる、キツめの肛虐が趣味。

青沼尚子(二十六歳)  
あおぬまなおこ

フジサンテレビのやり手報道記者。

## フローク 洗礼

旭テレビ報道局の美人記者

倉橋律子は、政界人、財界人、多くの芸能人や起業家をも取材した経験豊富な記者である。

情報のガードが固く、手強い大物相手でも

臆することなく懐に入り込み、隠された真実を暴き出す。

芯の強い女性であり、その高い能力は、自らの危険を顧みない性格に起因し、入社二年目では大きな仕事を任せられた。

この時の取材相手は防衛省のキャリア官僚、戸塚博昭。

彼には国有地売却問題や違法な政治献金などを受け取っている疑惑があった。大きく肥えた身体に、はち切れそうな黒スーツ。

国会開けの議事堂前で番記者たちに囲まれると、品定めをするよう目を細めている。



「戸塚さん、失礼します。旭テレビの倉橋と申します」

集まった報道関係者達を掻き分け、律子が取材を申し込むと、戸塚は「新人かね」と聞き返し、その後意外にもあっさり承諾。その時、律子の全身を舐めるように見た後、向こうから取材場所を提示してきた。

指定された場所は聞いたこともない都内のバーで、人通りもない路地裏にあった。ムーディーな音楽が流れ、薄暗く異様な雰囲気の内だ。

到着するなり背の高いボーイが薄暗い店内から現れ、店の奥に案内。

「戸塚様がお待ちしております、こちらへどうぞ」

（こんな店で……）

案内されたのは、六畳ほどでブラックライトが煌々と照る、如何わしい雰囲気個室。

「やあ、来てくれたね。ひび……、まあ隣に座りたまえよ」

ゆったりとしたソファーに深く腰掛けた戸塚は、すでに酒がはいっている様子で上機嫌の赤ら顔。

律子をニタニタ舐めるように見ると、嬉しそうにでっぷりと肥えた腹をさすって薄笑いを浮かべていた。

頬の引き皺りを隠すよう律子は「本日はこのような場を設けて頂き」と挨拶を済ませたあと「お隣りの席は……すみません、斜め前の御席で失礼します」と顔を伏せて言った。

途端、顔を赤くする戸塚。

「なんだ連れないそぶりだな」と強引に腕を引き寄せられた。

「きゃあッ」

「席は隣と決まっているんだ。そう、君みたいな美しい女性は僕の隣じゃないと駄目だろう」

「そ……それでは失礼しまして。早速、質問にうつらせていただきますが。いま議題となっている国有地売却に関して……」

「そんな事はどうでもいい、もっと僕のほうへ寄ってきてよ律子君」  
戸塚は律子の腰に手をまわし、スーツの上から臀部を撫でまわしはじめた。

「何をッ」

「……キスがしたいなあ。なあ、まずは乾杯だろう。」

お酒を飲んで口を湿らせようじゃないか」

面食らったままの律子はキスという単語に嫌悪感を示しながらも「……それでは」と言っグラスを交わした。

「今日はいいホテルも押さえてあるんだ」

「他の記者の方にもこうやって対応されているのですか？」

「何だとッ、政治の話はホテルでするのが基本だろう」

「……………ッ」

「君が全裸でマイクを持ち、僕の腹の上に乗る。」

僕は君を突き上げながら質問に答える。これが政治家へ対する  
女記者の取材だろう、常識を教わってこなかったのかね」

「……………ッ」

政治に関する質問をする時の「礼儀」だとも言われ、おぞ気が  
立った。

(まさか、先輩達もこうやって取材をしている?)

律子は絶句し、数秒間の沈黙の後にスクと立ちあがり

「し……………失礼しますッ」

「おい……………ッ律子君」

まともな精神では、このような場所に居続けることはできない。  
い。その場を立ち去り、逃げるよう店外へ。

ハア、ハア、ハア……。

店外に出て、路地裏に身を潜めると、携帯を取り出して、先ほどの出来事を上司にあたる女記者上原美咲に報告。

(どう考えてもセクハラ被害、許されていい訳が……)

「どうしたの倉橋」

「夜分遅く失礼します、先ほどなのですが、防衛省戸塚博昭さんの取材で……」

普通であれば律子を担当から外し、

他の記者をつけるどころだが、返ってきた返事は「ハートトラップを仕掛ける」という趣旨のものだった。

「な、何を……。上原先輩、事態を把握されておりますか」

「あなたより把握しているわ。すぐに謝ってホテルへ向かいなさい」

(どうして……。セクハラ被害を受けているのよ)

「それは女としての魅力を買われているということなのよ。あなたは魅力があるのよ。……わかる？これは大変に気に入られているという事。これ以上ないチャンスだという事を良く理解して」

「……………」

「相手は話す素振りをみせているのでしよう。このまま逃げるのはあなたの自由だけど、あなたが今やらなければ、他の女性記者がやるわ。」

特ダネを他社に取られてもいいのなら、このまま逃げなさい」

「そ……それは……………ですが」

「記者として、よく考えて。それにね……………」



政治家と言えど、一皮剥けばスケベオヤジばかり。

身体を提供し、情報を得るのが女記者の役目であるものだと言われ、信じられない事ばかりを言われ、頭が真っ白になる。

ここで逃げたらどうなるのか。放心状態のままではあるが、報道記者としての自分自身が、その深層意識に刻まれた何かが身体を動かしてしまった。

このような暴挙、その真実を暴き出してやろうという、律子自身に備わっている記者根性のようなものが店内に向けた。

「……やあ、考え直してくれたようで嬉しいよ。倉橋律子君」

戸塚は戻ってくることを解っていたかのように相変わらずどしどしりとソファーに腰をおろして煙草を燻らせていた。律子は冷たい汗をかき、スカートの裾を握る。

「先程は戸塚様からのお誘いを断ってしまい、大変失礼致しました。ど……どうか、お許しください」

「そうかそうか、それじゃあ床に手をつけて謝りなさいな」

土下座……。律子は土下座を強要されたことに怯んだが、

取材の為だと唇を噛みしばって床に両手をついた。

冷たい床の感覚が意識をより冷たく、鎮まらせる。

「むぐっ……、ううう」

頭を下げると、黒光りをするローファーで踏まれ、額を床にピタリと付けるかたちとなった。

「……申し訳ありませんでした。本当に反省をしております。お許し、いただけますでしょうか」

胸が痛い。苦しい。生まれて初めて味わう権力者からの凌辱を味わい、屈辱に嗚咽しそうだ。

「お……お許しいただけますでしょうか」その言葉ばかりを繰り返す。

それでも戸塚は、無言のまま数分間も律子の頭を踏み続け、煙草を吹かした。

「まあいいだろう。ここでの食事が終わったらホテルへ向かおうじゃないか」

ようやく許しの言葉があると、律子は涙を流して、更に深く土下座をした。悔しさか、安堵か理由のわからない涙。床にポツポツと落ちていく。

「え……ええ。うぐ……。えぐ、ありがとうございます……。と……戸塚様のお望みのままに」

「泣く奴があるか、さあ気を取り直して食事をしようじゃないか」

土下座が終わると、食事。

膝の上に乗れと言われると、命じられるままにお酌。口移し等をせがまれたが、嫌がるそぶりを見せず、積極的に接待をすすめる。

「さあ食欲も満たされた。いこうか……」

「……………」

夜が更け、満面の笑みの戸塚に肩を抱かれた律子は、深夜のホテル街へと消えていく。

一 嗚咽の接待取材

酔いがまわり、既に赤ら顔の戸塚はベッドの上。上機嫌で律子を組し抱く。

「いま僕がどういう気持ちかわかるかい」

「……………」

「今、君をすごく好きだという気持ちと、

……………そうだね、まず胸を触りたいという気持ちがある」

「……………どうぞ、お好きなように」

戸塚があらかじめ予約を取っておいたという地上四十階、高級ホテルのスイートルームにチェックイン。

部屋に入るなり戸塚は律子の全身をいやらしく撫でまわし、ベッドに放り投げたのだ。

「ああ、キスをしたいという気持ちもあるかな」

「……………シャワーを浴びてきますわ」

覚悟はしていたが、

スーツの上から胸を揉みしだかれ、戸塚の唇が迫ると、さすがに悪寒がし、逃げるように浴室へ向かった。

ベッドに残された戸塚は、やれやれと頭に手をあて、まもなく聞こえてくるであろう美女がシャワーを浴びる音に耳を澄ます。

（本当に戸塚博昭と性行為を……………、これが懂れていた報道記者の仕事、……………その実態だというの）

やや熱めの飛沫を浴びながら、律子は考えた。これが現実であった事、記者として仕事を続けるなら、この現実と向き合わなければならぬ事……。

(ここで逃げてもいいはず。でも、それが報道記者としての私の実力であるなら……。それならば……)

様々な思念を流すように、しばらくの間、棒立ちになってシャワーを浴びた。

「そろそろ出てきたらどうかね」

戸塚に呼ばれ、ふと我にかえると、動揺しながらも身体を拭いて、バスタオルを羽織ったきりの姿で浴室を出る。

その姿を「やあ、色っぽい姿だ」と称され大喜びで拍手をされた。

「っと、何かを決心したような顔つきじゃないか。

……それもなかなかこそあるものがあるよ」

「……これが女記者の本懐です」

「どうやら覚悟が決まったみたいだね」

それでも「さあ、まずは私の上に跨がるんだ」と言われると、律子は躊躇する。

戸塚は下半身だけ脱いでおり、いきり勃つ肉棒をビクビクと震わせながら、ひどく興奮していた。

肉棒の尖端、亀頭はねっとりとした透明な液で濡れている。

「君と会った時からだ、思い出す度にここから我慢汁が溢れるのだよ。さ……何をしているかね。はやく跨がりなさい」

それに粘液溢れるその箇所は、コンドームを装着していない。

「あ、あの……スキンは」

「何だと？セックスは生でやるものだど記者の先輩達から教わっていないのかね。」

「……………ッ」

律子が戸惑い、顔を背けたまま黙り込むと、戸塚の顔はみるみるうちに赤くなり、拳を握り頭の上に翳した。

(……………ッ暴力をふるわれる)

「わ……わかりました、お膝のうえ失礼致します。」

恐怖で律子は観念すると、熱くたぎる肉棒に手を沿え、自らの秘所に誘うよう腰を落としていった。

(くうう……………ッ)

まっとうに生きてきた律子。人生初めてのスキン無し。ぬめる肉棒が膣口に触れると、嫌悪感が溢れ鳥肌が立つ。

「そうだ、自分から挑んでこい。ひひ、味わって呑み込むんだ。」

そうだ。おうおう、律子のオマ×コに吸い込まれていくわい」

「あふッ、ハアア……………ああ、大きい。はあッ……………ううっく」

「まだ半分しか挿入されていないよ、もっと景気よくズツプリと……………おう、そうだ、気持ちがいい」

「くううッ……………ッふ……………ハア……………ハアアッ……………」根本まですべて挿入されると、更に大きさを増していくけたたましい肉棒。

戸塚は満足げにニタニタと舌なめずりをした後、胸にも手を伸ばしてきた。

(あふう……………ッ)

「ようし、いいぞ。腰を上下に動かしながら何でも私に質問なさい。たまにくねらせたりもするのだぞ。わははッ」

「ああむっ……う……それではまず」

（うわはは、たまらん倉橋律子の膣……膣……）

「と……戸塚様。それでは、うっ……質問をいたします……ッ

まず国有地売却につきまして……」

「あれか、あれの真相は根が深いぞ……ほーれッズブリ」

……ズムッ、ズツチュ……。

「はああッ」

律子は身体を仰け反らした。子宮を押し上げるように深く、深く突き上げられる。

「ううくッ根が深いとは……何か総理との因縁があるのでしょうか、くう、うう」

「ふゝむッ……キュッと締め付けてきたたまらんわい。まず総理夫人在るだろう」

「お……奥様が……おっおうう……くあッ、ひい……んッ」

子宮に流れ込む程に我慢汁が溢れているのが解る。妊娠をしてしまう恐怖にも律子は戦慄し、喘ぎとも悲鳴ともとれぬ声が漏れた。

「……その理由のひとつに既得利益の保護があり、また歪められた行政がそこにある。ふっふ……たまらん肉の締め付けだ。ようし、私も動いてやろう」

「ひんッ……ひんッんああ……あっ……は、はああ……あ、熱い……くうう……」

ズツチユ、チユツと卑猥な音をたてながら男女の結合部から蜜液が飛び、ベッドに染みてゆく。

「……………あ、んっ……………ひぐっ……………んんっ……………はぁ……………はぁ……………はぁ……………はぁ……………」  
そのうち腰に添えられていた戸塚の手が尻のほうへさがり、律子のすみれ色した肛門にのびてきた。

「ひぁっ……………そこは。あゝっ戸塚様、そのようなところはっ」

「女の部分もいいが、アヌスも具合が良さそうじゃないか。そのうち、この場所も頂かせてもらおうよ」

指の違和感にキュとすぼまる肛門の感触を愉しんでいる。

「そこ……………あっあっ うん、はぁあ……………力が抜けちゃう……………はぁああんっ……………」

「わはは、肛門は弱いかね律子君」

「あむむ……………。それで……………う……………奥様ですが、それとはどう密接に、ううむ……………関わっているということでしょうか」

ペシー…ッ。

その質問をすると、突然臀部を平手打ちを見舞われた。

(あぁ……………あぁあ……………。痛いッ……………どうしてなのッ)

「あまり欲張ってはいけないな律子君。座位で与える情報はここまでだ」

「……………。申し訳ございません。欲がでてしまいました。

この先はどのような事をすれば……………」

「この先は騎乗位だ、……………さあ私の腹に跨がりなさい。」

(ベッドで本格的に性交渉を……………。怖気がとまらない。けれど、真相に近付ける、それなら)

ここで引くわけに行かない律子は、躊躇せずにもぐった戸塚の腹に跨がった。

「お願いします……。律子をだ……。抱いて……」





サンプルではここまでとなります。

**是非、ご購入下さい。**